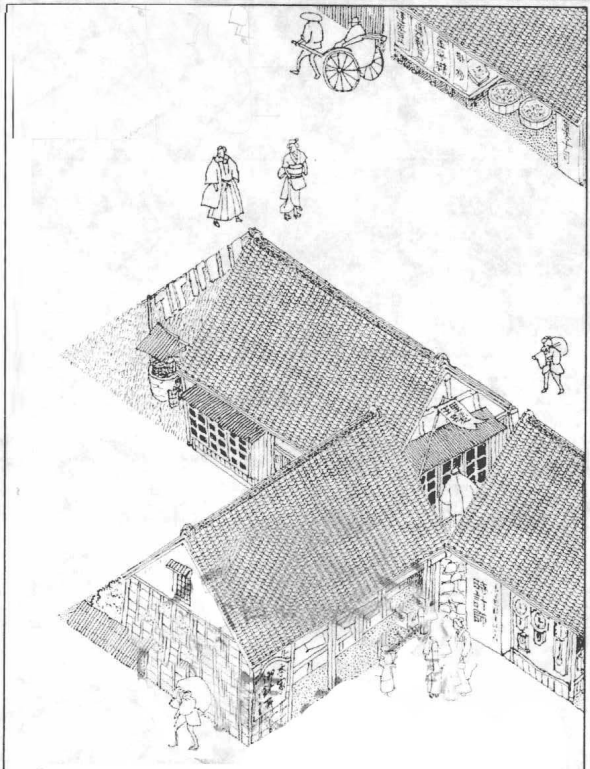
もとの黙阿弥

井上ひさし

文藝春秋



黙阿弥

井上ひさし

文藝春秋

もとの黙阿弥（もくあみ）

昭和五八年九月二五日　第一刷

著者　井上ひさし

発行者　半藤一利

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三－二三

電話（〇三）二六五－一二一一

定価　七五〇円

印刷所　凸版印刷

製本所　大口製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

© Hisashi Inoue 1983　Printed in Japan

もとの黙阿弥（もくあみ）

浅草七軒町界隈

装釘　安野光雅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

人物

坂東飛鶴　大和座座主、坂東飛鶴一座座頭

坂東飛太郎　飛鶴一座の番頭役

長崎屋新五郎　政商

長崎屋お琴　新五郎の娘

船山お繁　お琴付きの女中

河辺賀津子　河辺男爵未亡人、隆次の実姉

河辺隆次　河辺男爵家相続人

久松菊雄　河辺家の書生

国事探偵

常吉　車夫、七軒町住人

安吉　振売り、七軒町住人

パンの付焼(つけやき)屋

上野精養軒の出張給仕

柳橋芸者衆

岩谷天狗煙草宣伝楽隊

七軒町の人びと

場所

浅草七軒町にある芝居小屋「大和座」の内と外。

時

明治二十年（一八八七）四月下旬。ある日の夕方から、次の日の夕方までの二十四時間。

1　珍客万来

開幕の合図。場内、闇に溶ける。

やがて舞台の宙空に大提燈が一つ、浮びあがる。大提燈には「坂東飛鶴賛江浅草七軒町住人より」という文字が入っている。

大提燈に灯が入って数呼吸、舞台が明るくなる。上手に裸舞台、下手に仕切場（事務室）、中央が客席、すべて大和座内部の体（てい）。大提燈は大和座の場吊り提燈だった。なお裸舞台は楽屋や楽屋口を経て戸外へ通じている。また仕切場のかげは下足場というこころ。

客席は板張り。普段はその板張りの上に莫蓙を敷き、さらに客は一銭の使用料を払って座布団を借り、それに坐って芝居を見物するのだが、現在は興行停止処分を喰っていることもあって、座布団もなければ莫蓙もない。さてその板張りの床の上で、柳橋芸者の、まだ悪擦れしていない、若くて威勢のいいところが七八人「かっぽれ」を踊っている。芸者たちに振りを教えているのは大和座座主の坂東飛鶴。御狂言師から柳橋、それから築地ホテル館の接客人、やがて木場の材木問屋に囲われて、手切金がわりにこの大和座を手に入れ、「道化手踊り坂東飛鶴一座」の座頭になった。とにかく根っからの芝居者である。

やや離れたところで、ここ七軒町の住人の常吉と安吉が踊っている。常吉が車夫で、安吉が野菜の振売り（行商人）だということは、二人の動きからすぐわかる。というのは常吉は俥の梶棒を持って駆ける動作を、安吉は天秤棒をかついで売り歩く動作を踊りに持ち込んでいるからである。二人を教えているのは坂東飛太郎といって、飛鶴一座の番頭である。……と説明しているうちに「かっ

ぼれ」が終った。

飛鶴　（芸者たちに）とてもよかった。よほど見られるようになりましたよ。

飛太郎　（常吉と安吉に）とても見込みはありませんな。

飛鶴　さすがはこれからの柳橋を背負って立とうというだけのことはありますね。

飛太郎　商売が人力車夫だからって、常吉さん、（その恰好をして）踊りの中にまで商売を持ちこむことはないでしょう。

飛鶴　あなたがたのような後輩をもって、わたしも鼻が高い。

飛太郎　どうして安吉さんは踊りの中でまで（その恰好をして）野菜を売りたがるんですか。

飛鶴　もうなんにもいうことはありません。

飛太郎　もうなにをいってもむだですな。

飛鶴　ただしこの「かっぽれ」の急所は囃し声なんですよ。たとえば、豊年じゃ万作じゃサテ、明日は旦那の稲刈でサテ……と囃し声が入りましょう？　これを思いきり黄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

色い声で、それも皆で声を揃えて囃すのがコツなんですよ。そうすると踊りがぐっと引き立ちます。囃し声のところだけさらっとさらってみましょうね。シャシャシャンシャンシャン、

一同　かっぽれかっぽれ、ヨーイトナ　ヨイヨイ！

飛鶴　黄色い、黄色い。その声ですよ。……（歌わずに、ほとんど台詞で）白帆が　サ　見ゆる、

一同　ハア、ヨイトコリャサ！

飛鶴　ヤレコノコレワノサ、

一同　ヨイトサッサッサ！

飛鶴　みかん船じゃえ、

一同　サテ、みかん船！

飛鶴　サー　帆が見ゆる、

一同　サテ、ヨイトコリャサ！

飛鶴　ヤレコノコレワノサ、

一同　ヨイトサッサッサ！
飛鶴　豊年じゃ万作じゃ、
一同　サテ！
飛鶴　明日は旦那の稲刈で、
一同　サテ！
飛鶴　小束にからげてちょいと投げた。投げた、
一同　セッセ！
飛鶴　そう、それでいいんですよ。いまの呼吸を忘れずに、ね。
一同　ハイハイ！
飛鶴　置屋のおかあさんたちにくれぐれもよろしくいってくださいよ。
一同　ハイハイ！
飛鶴　あなたがたをここへお稽古に寄越してくださるおかげでどうやらこうやらおマンマがいただけていますと、そういって飛鶴が手を合せていたと申しあげてね。
一同　ハイハイ！

飛鶴　それでは今日はこのへんでおひらきにいたしましょうね。
一同　デハ、サヨウナラ！
飛鶴　気をつけて帰るんですよ。
一同　ハイのサッサッサ！

ト舞台は急にがらんとなってしまう。残ったのは常吉と安吉、それから飛鶴と飛太郎の四人だけ。

常吉　若くてきれいな娘が頭の天辺から出す黄色い声ってのも、乙なものだねえ。
安吉　牡丹がいて、芍薬がいて、バラの花がいて、姿もよかったじゃないですか。ほかにも梅に桜に百合の花……
常吉　梅に桜までは心当りがある。だが、百合の花とはだれのことだい。
安吉　ほら、それはさ……
飛太郎　（品評会をはじめた二人に）のんきですねえ、あなたがたは。このところずうっと

ここに入り浸っておいでだが（飯を掻き込む仕草をして）、こっちの方は大丈夫なんですか。稼がないでもいいんですか。

常吉　さいわい嬶ァだの山の神だのという口うるさい生き物を置いておりませんので、悠悠たるものです。

安吉　悠悠はちょいと云い過ぎにしても、メシはお隣りから、お菜はお向いからといった塩梅にうまいことやり繰っています。このごろは隣り近所がなんとなくよそよそしい素振りをしますから、昨夜なぞはメシの調達に深川まで出かけましたけど。お菜は四谷村のおじさんとこへもらいに行って断わられた。

飛太郎　それじゃやり繰っていることにならないじゃないですか。

安吉　はあ……

常吉　でも飛太郎さんて人は優しいねえ。こっちの竈の煙の昇り具合まで心配してくださる。

安吉　うん、飛太郎さんは優しい上に偉い。

飛太郎　あたしは月謝がいただけるかどうかを心配しているだけです。ちっとはお稼ぎ

なさいよ。日本舞踊のほかに歌舞伎声色でしょ、西洋舞踏でしょ、洋食作法でしょ、それから裁縫編物茶の湯生け花どどいつと、九つもお稽古事を習いながら、これまでただの一度も月謝を持ってきてくださったことがない。あんまりじゃありませんか。

飛鶴　（時事新報を眺めていたが）飛さん、そのお二人は、大和座が興行停止をくらったその日まで、毎日のように観にきてくださっていた御常連ですよ。

飛太郎　しかしあんまり図太すぎますよ。それに常連といったってこのお二人さんは木戸銭を払わない方の常連で……

飛鶴　常さんに安さん、九つじゃ数が半端でしょう。もうひとつ、漢文でもお教えしましょうか。それでちょうど十。区切りがいいでしょう、その方が。

安吉　お師匠さんは話せるなあ。

常吉　だからみんなに好かれていなさるのだ。飛太郎さんも坂東飛鶴一座の番頭さん、小さいことには目をつむって、もっとこう堂々と構えていなくては、ね。

飛太郎　なるべくならそういうふうに……、なんでわたしが常さんから生き方を教わらなきゃならないんですか。

常吉　まあまあ、抑えて、お平に。ちかぢか大金の入るあてがあるんですよ。七軒町の有志とちょっとした事業をはじめようと思っているんだ。そのときにはイの一番に月謝を払いますから。

安吉　お金になる上に、うどんとタバコには生涯不自由しないという凄い手を二人で発明したんです。

飛太郎　うどんとタバコには生涯不自由しない？　師匠、二人の様子がなんだか変ですよ。借金の言い訳を考えすぎて、二人とも頭がどうにかなってしまったんじゃないでしょうかね。

飛鶴は目をあげるが、またすぐ新聞に見入る。

常吉　脳味噌に異常はないです。それどころか二人とも生れてはじめてといっていいぐらい頭が冴えわたっている今日この頃です。こうやって稼ぎにも出ず落着いていられるのも、事業の成功にめどがついたからで。銀座街三丁目の岩谷天狗商会をごぞんじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb